

校長研修だより27

教師と生徒の二者関係②

～自分もっている「フレーム」～

2021・10・5 重枝 一郎

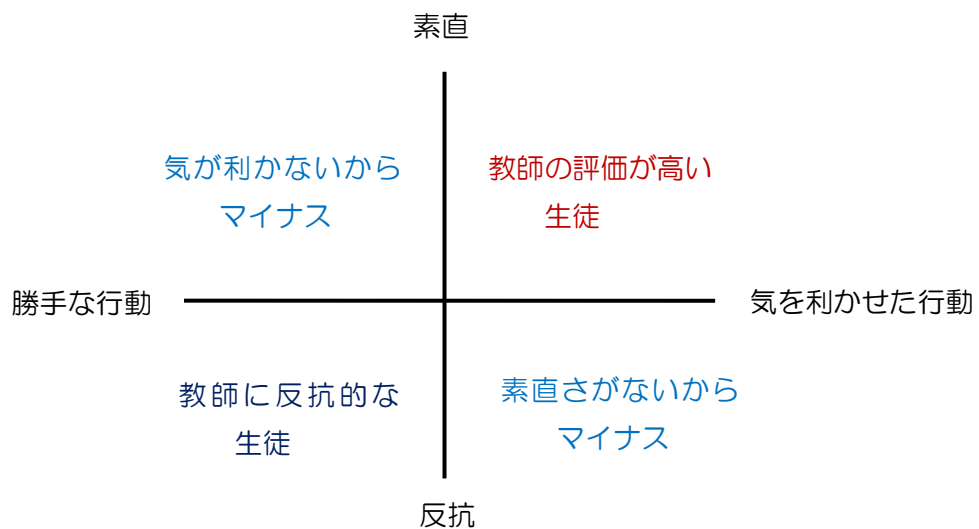
「教師は、教師の言うことを素直に聞く子どもを好む」（素直さ）

「最近の子どもは言われたことしかしない」（気を利かせた行動）

これは「その教師もっている一定範囲というフレームの中での話」である。ところが生徒も自分のフレームもっている。また、親しみを込めた教師のかかわりもマイナスになることがある。（優しさ＝お節介 陽気＝軽薄 率直＝無神経）

教師は、素直に自分の言うことを聞く子どもを好む一方で、気を利かせた行動を求める。

しかし、ある生徒が「気を利かせた行動」をしても、その先生のフレームを外れていたら、同じ行動が「勝手な行動」と評価される。これは、教師が一定の「フレーム」の中で評価しているからである。その教師のフレームを外れていたら「マイナス」評価をしてしまうという誤りに陥るのである。このような「ゆがみ」に陥らないように、日頃から自分の「フレーム」の広さを意識することが大切になる。



生徒を理解するときには、「ありのままの生徒」を受け入れているか、自分のフレーム（考え方の枠組み・思い込み）による「ゆがみ」はないか、それを「自己点検」する。

その際、「ハロー効果」「ステレオタイプのな理解」「教師の個人的な要因」「教師の好み」等について検討する必要がある。

	内容	例
ハロー効果	優れた点（悪い点）を1つ発見すると、他の全ての面も優れている（悪い）ように判断してしまう。	体育会系のキャプテンをしていたら、体力もリーダーシップも行動力もあり、人望も厚い人物と評価する。
ステレオタイプ（先入観）	社会的通念に人物特徴を当てはめて、決めつけてしまう。	一人っ子だからわがまま、血液型がA型だから几帳面等と決めつける。
個人的な要因	自分の生育歴等から、特別な思い入れをもつ。	自分が母子家庭で育ったから、母子家庭の子どもに特別な思い入れをもって接する。
個人的な好み	自分の好み、独自の価値観で評価する。	自分がスポーツをしてきたから、文化系より運動系の子どもを好む。

同じ生徒に対して、教師の評価と生徒たちの評価は違うことがある。生徒から情報を得るには、私たちは日頃からコミュニケーションをとる必要がある。さりげない会話をきっかけに、普段は見せない生徒の表情や本音を引き出すことができる。

教師にも「フレーム」があるが、生徒も「フレーム」をもっている。それぞれの「フレーム」を意識しながら、お互いのありのままを尊重し受け入れる関係性をつくるのが、決めつけやゆがみを回避する方法になる。それぞれ、**見えている世界が違う**。まずは、相手が見えている世界を知ることである。